神楽坂1～６丁目における景観と素材構成に関する研究

BR16044　佐野翔

指導教員　鈴木俊治

1. 研究の背景

東京都新宿区神楽坂1～6丁目の街並み景観は、多様化が進んでいる。メインストリートである神楽坂通りは坂下(1～5丁目)と坂上(6丁目)に区分される。また、商店街の脇の両側には花柳界の面影を残す界隈が存在している。

新宿区としての景観向上や保全に関する取り組みは存在するが、神楽坂地区においては建築ファサード景観の詳細調査は行われていない。そこで本研究では、昨年環境設計研究室が行った景観調査を発展的に継承し、低層部ファサードを機能、素材の観点から分析する。その結果と考察をもって、今後の神楽坂らしい景観形成に資することを目的とする。

2. 神楽坂の概要

神楽坂地区は新宿区と千代田区の境に位置し、明治以来、花街の面影を残す店舗が路地界隈に軒を連ねている。現在、花街は減少傾向にある一方、神楽坂通りにある店舗は様々なファサードを持つ店舗が増えている。平日、休日を問わず多くの来訪者がいる。

2-1. 研究対象範囲と調査対象箇所

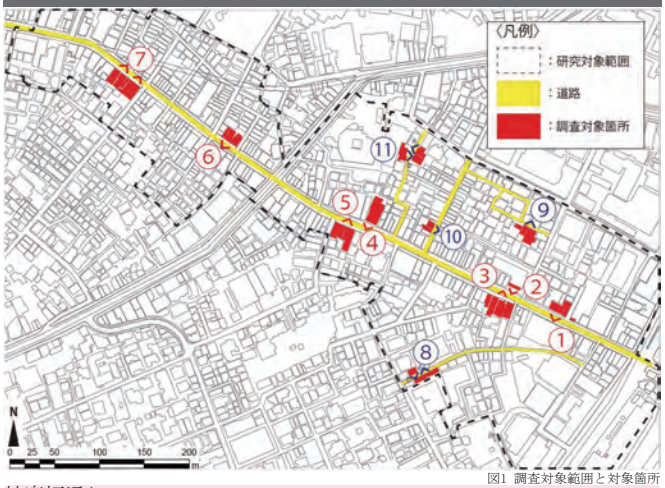

図1 調査対象範囲と対象箇所

神楽坂通り

【神楽坂通り1～5丁目】1Ｆレベルは、主に飲食店や小売店等が並ぶ商業エリア。街の骨格的街路の役割を担っている。毘沙門天を中心に平日、休日問わず賑わっている。

【神楽坂通り6丁目】神楽坂上交差点から東京メトロ神楽坂駅付近までを指す。通り沿いは、商業施設が多く並ぶがスーパー等の日常生活を支える店舗が存在する。

各横丁

【本多横丁】飲食店が多く立ち並び、昼の時間帯から利用されている店舗が多い。

【小栗横丁】西に行くに連れ１Fに夜営業の飲食店が増える。老舗銭湯はかつての芸者達が使用し、現在も尚使われている。住宅も多い。

【かくれんぼ横丁】神楽坂仲通りと本多横丁から通じる路地であり、路面の石畳と黒塀板が特徴である。道幅は狭くかつての花街の面影を強く残す通りである。

【兵庫横丁】かくれんぼ横丁と同様に石畳の路地と料亭が在る閑静な道である。映画や小説の舞台になる事も多々あり現在も観光名所となっている。

3. 調査

3-1. 昨年の結果を踏まえて

本研究では、歩行者が無意識に見た景観を「一次景観」、何か特定のものに着目した景観を「二次景観」と称する。二次景観では焦点が特定物にクローズアップされるため、景観認識においては個々の建物ファサードや広告物を構成する素材や色彩の影響が大きいと推察される。

したがって本研究では、歩行者のアイレベルにおけるファサードの機能や素材に関しての詳細分析を行う。また、歩行者アクティビティ調査[*1]と関連させる。

3-2. 調査方法

調査対象箇所は、神楽坂通り(図1①－⑦)、各横丁(図1⑧－⑪)である。

分析対象とする建築ファサード面に関しては、予備調査をもとに歩行者滞留が見られた、或いは見られそうな場所を選択した。対象とする建築ファサードは歩行者が通行しながら見ている低層部（１F軒高下）とし、分析は写真を用いて行う。

撮影した写真をもとに立面図を作成し、作成した立面図を「景観構成機能」、「景観構成素材」により分類をする。更に各要素の占有面積割合を出し、箇所ごとによる考察を行う[*2]。

〈撮影方法〉

・対象の建築ファサードの1F軒高以下に対して正面から撮影を行う。

・大人の平均身長を考慮し地上1.5mで撮影する。

※二次景観は回頭動作等により、ファサード面に正対した視野により認識される。

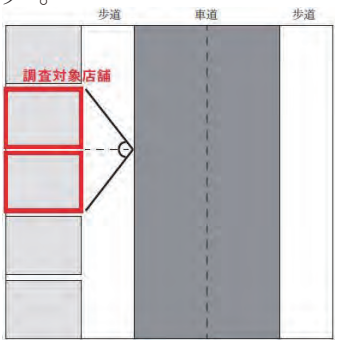

図2 撮影方法説明図

〈凡例と定義〉

a － 景観構成機能の定義と凡例

ファサード面を構成する機能により分類する。

■看板■開口部■スルー■植栽
■商品■着座可能場所■その他

○看板：広告物及び商品でない置物を含む。

○開口部：店舗内を見通すことが可能なガラス面。ドアのガラスも含む。

○スルー：ドアが無く、自由に通行が可能な部分。

○商品：売られている物。

b － 景観構成素材の定義と凡例

ファサード面を構成する材料により分類する。

■コンクリート■石・リシン■紙・木材■金属
■プラスチック■ガラス
■その他■その他(スルー)

○石・リシン：外装用石材（タイル、レンガ）を含む。

○その他：商品及び可動広告物を含む

○その他(スルー)：定義aのスルー部分を示す。

4. 調査結果

以下に例として調査箇所①について、3-2の手順より作成した立面図と機能(a)、素材(b)による分類を行った図、構成比率グラフを示す。

4-1-1. 神楽坂通り(1-5丁目)箇所①の分析結果

[立面図]

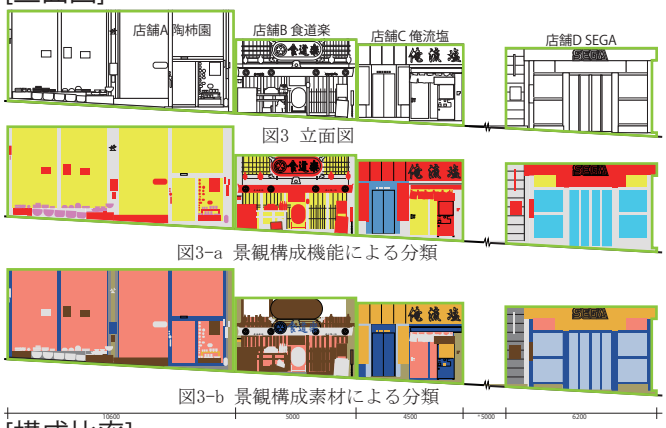

図3 立面図

図3-a 景観構成機能による分類

図3-b 景観構成素材による分類

[構成比率]

a) 景観構成機能

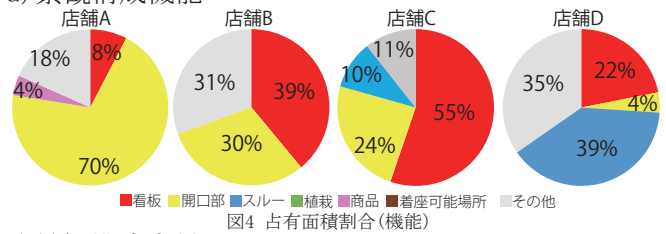

図4 占有面積割合(機能)

b) 景観構成素材

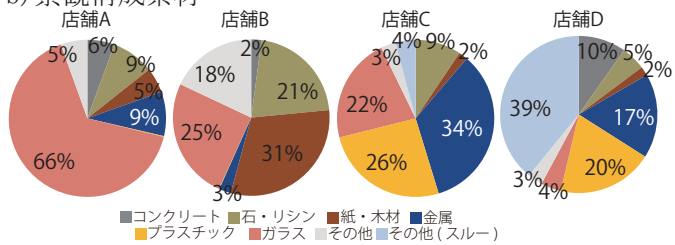

図5 占有面積割合(素材)

4-1-2. 神楽坂地区の分析結果

今回、調査対象とした箇所の平均値は以下のとおりである。神楽坂1～5丁目は図1の①～⑤、神楽坂6丁目は⑥～⑦、各横丁は⑧～⑪である。

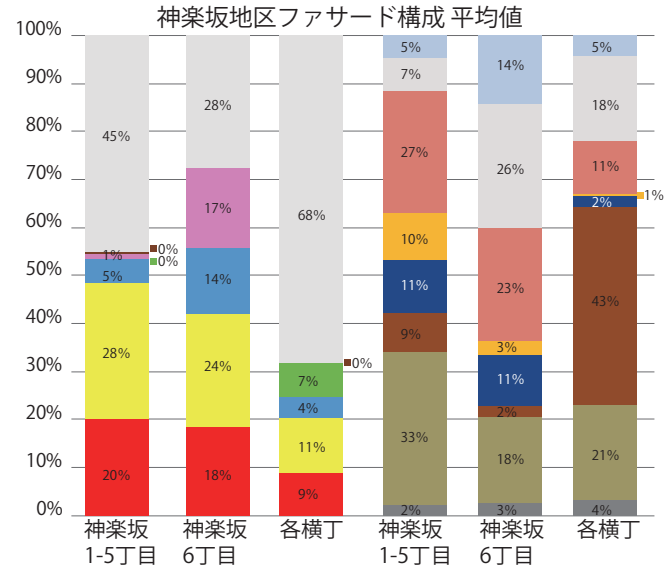

図6 占有面積割合－平均値

5. 結果と考察

分析結果から得た主な特徴について記す。

■神楽坂通り1～5丁目【機能】平均値では「その他(45%)」「開口部(28%)」「看板(20%)」の順に多く、3種類の合計は90%以上となった。「その他」の内訳はほぼ外壁である。検討対象箇所ごとに見ると「植栽」「着座可能場所」は少ない。

【素材】外壁は「石・リシン(33%)」「ガラス(27%)」の順に多く2種類の合計は60%である。「石・リシン」の内訳は外装用石材、タイルがほとんどであり、色彩は黒、灰色等の落ち着いたものが多い。

■神楽坂通り6丁目【機能】平均値においては「看板(18%)」「開口部(24%)」となり、神楽坂1～5丁目と大差はない。一方で「商品(17%)」「スルー(14%)」となり、神楽坂1～5丁目と比べ非常に大きい。実際に商品を見て店内に入ることが可能なため人の集中や滞留が発生すると考えられる。

【素材】「その他(26%)」が最も多く、内訳は「商品」や「看板」が主である。外壁素材のうち「ガラス」「金属」は神楽坂1～5丁目と同等である。

■本多横丁【機能】「その他(34%)」(主に外壁)「看板(25%)」「開口部(22%)」の順に多い。また「植栽(13%)」が見られた。「着座可能場所」の割合は神楽坂通りと同様とても低い。

【素材】「木材(39%)」が多く、他の横丁と類似する一方で、「ガラス(20%)」が多いことはかくれんぼ、兵庫横丁と異なる。その理由として昼から営業している飲食店が複数存在していることが挙げられる。

■小栗横丁【機能】「その他(53%)」(ほぼ外壁)「開口部(29%)」「看板(18%)」の順に多く、この3種類で合計がほぼ100%になった。

【素材】外壁は「木材(31%)」「ガラス(29%)」の2種類が主である。

■かくれんぼ、兵庫横丁【機能】外壁を含む「その他(ほとんど外壁や塀)」が7割以上になり、横丁の特徴である外壁に閉じられた構成となっている。また、どちらの道にも「スルー」が見られた。かくれんぼ横丁では、全ての検討対象箇所において「植栽」が見られた。

【素材】黒塀は「木材」、外壁や塀は主に「石・リシン」で構成されている。入口となる部分が「ガラス」ではなく「その他(スルー)」となっている店舗が見られた。

6. 今後の神楽坂の展望

〈達成できるSDGs〉

神楽坂地区において二次景観のファサード分析を景観構成機能、素材の観点から行い、特徴を把握した。これによりファサード景観の実態が明らかになった。この結果が、地域住民が神楽坂の地域らしさや誇りを知る材料となり、神楽坂らしい持続可能なまちづくりの発展に繋がることを期待する。

7. 参考文献

①宮路敦寛『神楽坂1～5丁目における屋外広告物が街並み景観に及ぼす影響に関する研究』(出典：芝浦工業大学修士論文(2018))

②新宿区景観形成ガイドライン

③屋外広告物に関する地域別ガイドライン(神楽坂地区)

*1：歩行者アクティビティ調査に関しては、BR15040嶋村文孝「神楽坂地区におけるファサード景観と路上アクティビティの実態と関係性に関する研究」を参照

*2：3-2は鈴木研究室―神楽坂地域活動班としての共同研究の一部である。